

インドネシアの旅

大竹 伝 雄*

1978年の11月、インドネシアのジャカルタでアジア太平洋化学工学連合(APCCChE)の第1回大会が開かれた機会に、東南アジアの各地をみて廻った。これまでの東南アジアについての私の知識といえば、戦時中の新聞の記事からえたのがそのすべてである。このたびの旅行によって、東南アジアに関する認識を新たにし、それと同時に南の国の人たちに関する関心もたかまってきた。これはそのときのインドネシアの印象記である。

シンガポールからジャカルタへ

シンガポール空港から Garuda インドネシア航空でジャカルタに向う。スマトラやボルネオが見えないかと窓から見おろすと、コバルト色の海にきれいな珊瑚礁にかこまれた大小さまざまな島影が浮んでいる。地図とみくらべても名前が探せるはずがなく、地図にも載っていない無人島が、かぎりなく散らばっている。戦前、金子光晴はマレー蘭印紀行のなかで“うつくしいなどという言葉ではいい足りない。悲しいといえばよいのだろうか。あんまりきよらかすぎるので非人情の世界にみえる”とこの辺の海を形容していた。

この静かな海面を一艘の貨物船が白波をあとにしてゆっくりと東へ進んでいる。明るく、のどかな光景である。それでいて寂寥とした孤独感を与えるのは、かつてこの海を輸送船が多く、の兵士を東の島々へ運んだことを思い出させるためだろうか。そういえば、ジャワ、バンタム湾上陸に加わった大木惇夫の「海原にありて歌へる」という学生のころ読んだ詩集が思い出されてくる。

1時間ほどしてジャワ本島の上空にでる。水

* 大竹伝雄 (Tsutao OTAKE), 大阪大学基礎工学部, 教授, 工学博士, 化学工学

田が青々と茂っており、その間を河川が蛇行し、運河が走っている。その向うに赤煉瓦の屋根やニッパ椰子の小屋が密集している。いかにも人口密度の過大さを想わせる風景である。空港では列の後尾に並んだためか、税関吏が手をそっと出してカネ、カネとつぶやく。ポケットから日本の硬貨を300円ほどとりだして渡すと、開きかけたトランクをすぐ閉じて、一言もいわず通してくれた。

バスで40分ほどして大統領官舎や日本大使館諸官庁の集った新市街に入る。旧市街の民家とのコントラストが強い。ロータリーの噴水のある池の中央高く、男女のブロンズ像が立っている。愛の塔とよばれるらしく、青年の右手は太陽に指向けられ、娘の左手には花束がかかえら

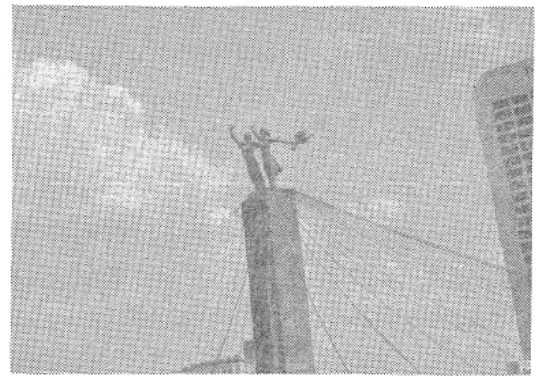


写真1 ジャカルタ市内ターミナルの愛の塔



写真2 大統領官邸

れ、いかにも新生インドネシアを表徴している。その傍のプレジデントホテルがわれわれの宿舎である。道路をへだてた16階のホテルが日本の賠償によって建てられたインドネシア・シラトンホテルであって、これが APCCChE の会場である。

APCCChE について

世界の化学工学界は一つになって協力し合おうとして、ヨーロッパ、アメリカ大陸ではすでに連合体がつくられている。アジアを一つにまとめ、学会もなく、孤立している発展途上国の化学工学者に連帯感をもたせ、ひいては各国に化学工学会の設立をうながそうといった主旨をふくめて、京大水科篤郎教授の長年にわたる尽力によって設立されたのが、アジア太平洋化学工学連合、Asian-Pacific Confederation of Chemical Engineering (APCCChE) である。参加国はフィリッピン、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランド、インド、韓国および日本の10ヶ国である。その第1回が予定よりも2ヶ年近く遅れて、ようやくジャカルタで開催されることになった。

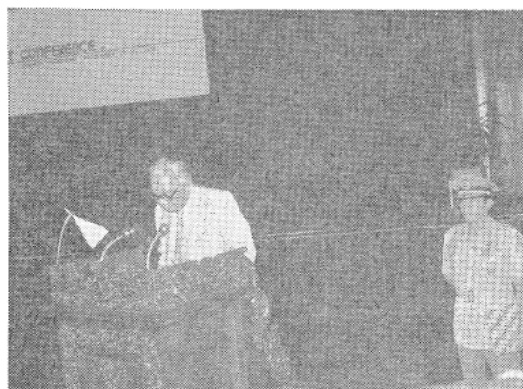


写真3 挨拶する Malik 副大統領

開発式には背広、ネクタイ着用、定刻9時の30分前に着席のことと、念のはいったお触れである。ひな壇には各国の委員の姿はみられず、インドネシアの大使や委員長が並び、ガードマンに守られて入場された副大統領の臨席をえて式は始められた。委員長の開会の辞、副大統領の祝辞につづいて科学技術庁長官の技術に関する諸問題と題する特別講演があった。会場の雰

囲気のものものしさに反し、挨拶の内容はどれも謙虚なものであった。インドネシアの後進性を素直に認め、先進国に追いつくべく努めているが、多くの制約のために思うにまかせない。アジア各国の学問、技術の交流あるいは協力は、人類の平和と繁栄のためにも必要であり、そのためにも、この化学工学会議が大きな役割を果たしてほしいと強調していた。

つづいて2会場に分れて2日間の研究討論会に入った。参加者は当日の発表によると、シンガポール(2)、タイ(2)、韓国(10)、日本(53)、オーストラリア(3)、インドネシア(245)計315名である。研究テーマは資源、エネルギー、環境、教育にしばられ、発表件数は37件で、そのうち日本人によるもの19件であった。1件につき20分講演、10分討論が予定され、内容の程度はさまざまである。インドネシア人による座長は、予稿をよく読んできており、質問をひき出すよう努めている態度がとくに印象に残った。またインドネシアの若人の発言が多く、発展途上国の青年の意気込みを示していた。

見学会のこと

最後の第3日は、パレンバン製油所、ジヨグジャカルタとボルブトゥール遺跡、ボゴール植物園の3班に分れた見学旅行である。私は最後の班に参加した。ジャカルタから南へ60km、クーラーのないバスにゆられて約2時間の行程である。イギリス人ラッフルが1812年につくったという世界的に有名な植物園で、1000種余りの熱帯植物と3500種の蘭がここの自慢である。案



写真4 ボゴール植物園内の創立者ラッフル記念碑前のオーストラリア Fowler 教授

内書によると、1962年に美智子妃殿下が訪問されたとき名づけられた新種蘭「ミチコ」があるそうであるが、数が多くてみわけられなかった。

帰途ミニインドネシア公園に立ち寄り、インドネシアは西はスマトラから東はニューギニアの一部にわたる3千余りの島からなり、いろいろ違った種族・文化がある。これが共和国として一つに結ばれている。そのためこのミニインドネシアは短時間にこれらが眺望できるよう100ヘクタールの広大な敷地に、各地の伝統的な建物様式の家屋や民芸品を集めた、一種のインドネシア民族博物館である。

帰りのバスの中で三日間の成果を考え、よくこれだけの国際学会が開かれたと思う。無事終了できたという自信は大きいのではなからうか。この国のエンジニアの中には日本を訪ねたことがある者が多い。東京のエンジニアリング会社で一年間教育実習をうけたいという人。半年日本各地の化学工場で工場運転の教育をうけたいという人。それぞれの経験は異なっても、彼等の日本に対する関心は私たちには考えられないほど強い。これには、プラントを建設されたエンジニアリング会社、あるいは現地に合弁会社をつくって生産にあたっている多くの人たちの苦勞がようやく実りかけてきているためであろう。

今後ともアジアの人たちと共に生きて行かねばならないわれわれ日本人として、インドネシアの国情を知り、何人かの既知をえたいということは、私のAPCChEの最大の収穫だった。

レディスプログラム、さよならパーティー

会期中の2日間、レディスプログラムが別に組まれていた。ジャワ更紗(パチック)のロングスカートに、共切れのたすきで正装したインドネシア婦人に混って、各国の婦人が参加した。彼女たちは、まず大統領官邸に招かれてスハルト大統領婦人の接待をうけ、邸内に設けられたステージで繰り広げられる民族舞踊やスマトラ島の伝統的な結婚の儀式を觀賞した。つづいて市内観光、パチック工場、最後にはショッピングに案内された。



写真5 調見をうけるスハルト大統領婦人

第2日の晩にさよならパーティーが催された。案内状には男性は長袖のパチック着用のことと書かれている。いかにもお国柄らしく、これが男子の正装とのこと。開会の挨拶につづくグループサウンズの真白き富士の根によって幕が開かれる。つぎつぎと日本の歌謡曲がつづき、最後はみよ東海の空あけて……と特別のサービス振りである。



写真6 さよならパーティーでのバリ踊り

ガメランの哀調をおびた伴奏に繰りひろげられる民族舞踊は、いずれも魅感的で、指先と視線のうごきで感情を表現している。竹製の木琴の演奏、ブンガワンソロをはじめとするインドネシア婦人たちのコーラス。各種民族衣装をまとったファッションショー。フロアから舞台上る素人演芸。各国のゲストによる文字通りのお国自慢。……12時をすぎても南国の夜は果てることを知らない。

神々の庭、バリ島

学会のあとはバリ島行である。仕事がすんで、どの顔も開放感で明るい。ジャカルタから

ジャワ本島の海岸線ぞいに東へ飛ぶこと1時間半。陸地がとぎれ、海峡の向うに海岸線を浅黄色の珊瑚礁でふちどられた陸地が見える。最後の楽園、数千のお寺の島、芸術の島とよばれるバリ島である。岬の先端を半周してデンパサールの空港につく。

空港には平良さんという日本人のガイドがわれわれを迎えてくれる。ただたどしい日本字で書かれたスケジュールと島の地図が配られる。ホテルに着くまで、バリ島の説明につづいて彼の経歴が話された。沖縄に生れ、九州で育って軍隊に入り、中国からマニラと転戦し、ジャワで終戦となり、それにつづくインドネシアの孤立戦争に協力して40数名の戦友と共にバリ島に残留したそうだ。そのとき14名が戦死し、残った戦友もつぎつぎと病死し、彼らの墓守が最後まで残った私の役目ですと語っていた。原住民と結婚し、8人の子供を育て、28才になる長女は小学校の先生をしているとのこと。インドネシアが孤立し、久しぶりに日本人と会っても日本語が口からどうしてもでず、観光客の増加につれてすこしづつもどつたと述懐していた。大正9年生れというから、私と同じ年だ。いつか読んだビルマの豎琴の水島上等兵の面影と重なってくる。



写真7 ホテルで観迎する原住民

宿舎のバリビーチホテルの玄関では、4人の原住民がガメラ音楽でわれわれを歓迎してくれる。早速、竹筒に入ったバリ特産の米で作ったという甘いシェリー酒、ブレアの配給をうける。竹筒には南国特有の蘭の花まで添えられており、いやがうえにも旅情をかき立てる。

芸術の村、ケチャックダンス

バスに乗って金銀細工の村、彫刻の村、絵画の村をショッピングをかねてつぎつぎと見てまわる。バリ島の人たちは誰もが芸術家といった感じさえうける位に、村の名所で熱心に作業している姿がみられる。木彫の店には奇怪な形相の像、神話に題をとった皇子と王女、神に祈る女性像、農夫など、古典様式のものから現代風のものまでいろいろ飾られている。黒たんやチーク材からでき、きめの細かい細工がほどこされていて、どれも安い。



写真8 バリ島娘に囲まれた筆者

バリ島では、いつもどこかでお祭りがあるらしく、バスの窓からお祭りのお供えを頭に高々とのせていく女性の姿があちこちでみられる。いかにも明るく、南国らしい風俗である。突然、道路わきの広場から髪を花で一面に飾った若い女性の集団が現われたときには、異様というか、驚嘆にも似た雰囲気がかもしたされた。バスを停めてもらって何枚かシャッターを切ったが、群集でもあり、彼女らが移動していたので、仕上がった写真はどれもポイントが定っていなかった。

夕闇がせまるとケチャックダンス(猿の踊り)が始まる。暗闇の中に立てられたたいまつを囲んで、150人ほどの半裸の男たちが、十重、二十重の輪になって座っている。耳にハイビスカスの真赤な花をつけて、猿の鳴き声に似せた合唱を繰り返す。その輪の中でヒンズー教に材をとった皇子とお姫さまと悪人とのお話が展開する。その間、男たちは手や腕のうごきで感情を表現する。いやがうえにも幻想的な雰囲気が

ただよい、われわれを魅惑する。

幻想的な気持ちに誘われて、ホテルに帰ってから海岸を散歩する。ネオンや街燈から遠ざかった南国の海岸は星かげて明るい。いままで忘れていた南十字星を思い出し、星空を見上げていると、傍にいた原住民が、10分程前に沈んだところだ。明晩8時40分～10時15分の間ならみられると日本語で教えてくれた。ふとみれば、オリオン星座は頭上に輝いており、やはり南国の空だ。沖あいが光っているのは、珊瑚礁に生息する夜光虫のせいか。原住民は明朝6時にカヌーで珊瑚礁を案内するときそってくれたが、旅のつかれで果せなかった。

バリ島観光

バリ島は雨期である。朝から激しいスコールで、バスの出発時になっても止まない。車窓から道路わきを眺めると、町角には奇怪な形相の偶像が立ちならび、個人の家にもそれぞれ神祠がまつられて、門という門には彫刻がほどこされている。郊外にでるところには小降りになったが青空はみえない。道すがらひろがる椰子林は、いかにも南国らしく、その向うの段々畑や竹林などの静かな田園風景は、いかにも日本の農村を思わせる。

しゅろうと石でつくった特有の寺がづぎづぎと出現する。そのたびごとに観光客は色とりどりの腰ひもを巻きつけて参詣する。大統領の夏の宮殿の麓には聖泉があって、住民の沐浴場である。男女別になっており、年配の女性が腰に布をまきつけたまま沐浴している姿がみられた。

名所キンタマーニは白煙をあげるバツ山を中心にした高原地帯である。カルデラ湖をみおろせる休憩所で昼食をとりながら雲の切れるの



写真9 バリ島の子供たち

を待たが、わずかに湖面をのぞかせただけで、バツ山はついに顔をみせなかった。

キンタマーニを始めとし、バスの停るところでは、みやげ物や果物を売る子供たちが観光客をとり囲む。“あなた、あなた。” “いくら、いくら。”とわずかにおぼえた日本語で何とか買ってもらおうと、いちらしい位真剣になって迫ってくる。いずれも小学生位の子供である。手荷物の増えることから買物をひかえて、持っていたコインをみんなに配ってやった。アメリカの硬貨を日本のと替えてほしいとたのむ子供があり、ボールペンを誇らしげにみせるので、私も出してみせると、交換しようとする女の子もあった。みんな素朴で、いちらしい。みんな幸せになってほしいといった祈るような気持ちにもなる。そういえば、今年が国際児童年である。

デンバサール空港に着くと、再び激しいスコールの来襲で、夕闇せまる滑走路は水びたしである。幸い塔乗するところには雨もあがった。機上から見下ろしても、雲のために街の灯はもとより、島影すらみえない。たのしい二日間の思い出をあとに、飛行機は西に向っている。

もう一度バリ島を訪ねてみたい。

